

新・林・業・人

この人この経営

安定した出荷ができるように
林齢の構造改革に取り組み
若手人材を育てることも大切

ヤマサンツリーファーム

黒田 仁志^{まさし}
黒田 真峰^{まほ}



従業員の皆さんと。後列左から2人目が仁志さん、前列左端が真峰さん

明治時代から続く

宮崎県美郷町。日向市と接する緑豊かな中山間地域だ。黒田仁志さん(53歳)は、大学卒業後、家業に入り、明治時代より5代にわたり育てられてきた山林を2003年に父である和雄さんより受け継いだ。

経営する山林は約1000畝と県内で最大規模。県全体で生産や輸出に力を入れているスギが主力だ。所有山林は所在地の周辺にそれぞれ50畝以上の団地で集約されている。全従業員10人が一つの現場で集中的に施業している。

年間6000立方メートルの木材を生産し、大手林産加工業者や県内外の原木市場に出荷する。主力の住宅用材などに加え、バイオマス発電用のチップ用材も販売している。また、一部は市場を通じて中国を中心とした海外にも輸出されている。経営における強みのなかで特筆されるのが、若手人材の豊富さだ。従業員の平均年齢は34歳と全国の林業従事者の平均52.4歳(令和元年度林業白書)を大きく下回る。背景には、林業界全体を見据えた、人材確保に向けた取り組みがある。毎年、みやざき林業大学校より

約20人の実習生を受け入れている。実習生は3週間程度、現場で林業機械の取り扱いなどで基本を実習する。

「受け入れている間、正直、仕事ははかどりません。それでもうちの現場で実習することで、実習生たちが林業により興味を持ち、将来の全国の林業を支える人材となってくれば嬉しいです」と仁志さんは語る。

実際に仁志さんの下で実習を受け、林業の世界に飛び込んだ人は多い。仁志さんの下で働きたいと手を挙げた人や、実習生から仁志さんのことを聞き入社した人もいる。皆ベテラン従業員からの熱心な指導を受けながら日々技術を高めている。

こうした取り組みの積み重ねが、他社から羨ましがられるほどの将来にわたり活躍してくれる人材の確保につながっている。

長期戦で所有山林の構造を改革

一方、仁志さんが長期的に改善をはからなければならぬと考えているのが、所有山林の林齢構成だ。経営する山林は林齢45〜65年の木が多く、所有林の大半が伐期を迎えている。

ヤマサンツリーファーム
 所在地 ●宮崎県美郷町
 就業時期 ●仁志さん 1985年
 真峰さん 2018年
 経営規模 ●1,067ha
 事業内容 ●育林・素材生産
 URL ●<http://www.yama3treefarm.com/company>



明治初期以降、第二次世界大戦

前まで黒田家の林業は所有林から木材を伐採し、木炭化し販売する「炭焼き」が中心であり、山林も原料伐採が主となっていた。戦後、「炭焼き」中心から「再造林」中心の林業経営にシフトし、植林に力を入れ始め、全国で拡大造林が進んだ1970年ごろまで植栽を進めた。その結果、所有林の林齢に偏りが生まれている。

仁志さんは状況改善に向け、所有山林に対し植林に加え伐期の調整を開始。主伐再造林をおこないながら、最終的に80〜100年齢程度の伐採に適した林齢の木材が安定出荷できるように、所有山林の林齢構造改革に取り組んでいる。

「植栽された山の様子を見ると、先代・先々代がその時々でどのような考えで山を造っていかうと考

えていたのかよくわかります。

私もそんな先代・先々代の考えを大切にしながらも、自分の戦略も反映させて山造りに取り組んでいきたい」と仁志さんは語る。

引き継がれる山造り

仁志さんは長期的な視野で山造りに取り組んでいるが、先代の考えと同様に次代の考えも大切と語る。現在の造林の成果を享受するのは次代からだ。

幸い、仁志さんには自分の想いを受け継いでくれる頼もしい存在がいる。長女の真峰さん(24歳)だ。

真峰さんは小さいころから祖父や父につれられて山に登り、森と親しんできた。森では、木の魅力を感じるのと同時に木に対する従業員

がしたいという想いが自然と膨らんでいった。小学校の卒業文集では早々と将来の「山師」入りを宣言。

高校を卒業してもその想いは変わらず、父と同じ東京農大に進学、林学を専攻した。「東京の奥多摩で林業実習があったのですが、実習をしていると、地元を思い出してホームシックになりそうでした。私にとつての山林はやはり地元美郷町なのだと感じました」と真峰さんは語る。現在は基礎体力・技術向上の真つ最中だ。

「木の伐採作業一つとっても、その重さで腰がふらつきチェーンソーが満足に扱えなかったり、斜面で木を切る際に水平に切っているつもりが斜めになったり、と悪戦苦闘しています」と話す。目下先輩の指導の下、確実にチェーンソーを操れるように取り組んでいる。

仁志さんは将来の後継を見据え、真峰さんに基礎を完全に身に付けさせたうえで3年を目途に現場を終了させ、経理などの全社的な経営に少しづつかわらせる考えだ。

「現在、林齢構成の見直しを念頭に再造林を進めている山造りについては、伐採時の経営者となる真峰に意見を聞くこともある。また真峰には経営の緊張感を共有する

ため、経営方針や借入金の状況も教えている。プレッシャーもあるだろうが、早めに経営者の視点や長期的な林業経営の視点も身に付けてほしい」と仁志さんは語る。

林業界に、人よ集まれ

そんな大きな期待に苦笑いする真峰さんだが、自身でも大きな目標を立てている。経営の確実な承継に加えて、林業に携わる人々を増やすことだ。真峰さん自身は地元や林業が好きで経営に飛び込んだが、高校・大学と進学、就職する過程で周囲の人々が林業に接点がなく、林業を知る機会が乏しいイメージを抱いていた。それを林業に触れる窓口を広げて、林業の魅力を感じてほしいと思っている。

「考えているのは、端材を使って香りを抽出しパフュームとして販売すること。そのための研究も地元と協力して進めています。林業のイメージが変わり、仲間が増えれば地元活性化にもつながる。少しずつでも具体化していきたい」と目を輝かせて語る真峰さん。それを温かく見守る仁志さん。想いはつながる、そして、若い力が林業を変えていく。

(情報企画部 高雄和彦)